

	<p>2007年7月15日 第61号</p> <p>発行：いたばし水と緑の会 事務局</p> <p>年会費 2,000 円 郵便振替 00170-8-352508 いたばし水と緑の会 http://homepage3.nifty.com/mizutomidorinokai/ E-mail : mizumidori@nifty.com 〒174-0063 板橋区前野町 5-31-7 瀬田方 tel&fax3969-7124</p>
---	---

ツマグロヒョウモンチョウのことなど

地球温暖化が叫ばれて久しいが、動植物にとっては棲む場所や繁殖地を高地・高緯度地域へと移し(広げて)いるものもある。身近なところではクマゼミが東京でも頻繁に聞けるようになったり、第59号でも報告したように、いろいろな南国の小鳥(飼鳥)が野生化したり、植物も暖地のものが分布を北進しているようだ。

蝶の世界でも今まで見られなかった暖地系のものが、関東から東北にまで発見されたと、新聞や放送、インターネットなどで報じられている一種が、ツマグロヒョウモンチョウである。数年前までは関東地方にはいなかった蝶なのだが、最初に庭で見たのは平成17年の夏で、秋までに3回ほど見かけた。何れもメスで地上の野草に産卵しているような挙動が観察された。平成18年になると5月から9月頃までの間オスも交えて頻繁に現れて交尾・産卵、そして赤黒い幼虫が這っているのを何度も見かけた。この年9月24日の自然ネットでの観察会(双葉町の氷川神社境内)で、盛んに産卵していたツマグロヒョウモン出会った。今年は6月からは毎日のように飛来するようになった。

今年3月9日、大きさが少し違う2匹の幼虫(2齢くらい)が庭の敷石の上に出ていて、あたかも日光浴をしているのを見つけた。写真を撮り10号の深鉢で飼い、少し観察してみることにした。その後出て



上：ツマグロヒョウモン
 右：ツマグロヒョウモンの





幼虫(左)と蛹(右)

きた幼虫2匹を加え、4匹を一緒に育ててみたので概要を以下に書いてみる。

幼虫は全体が黒く、細い毛がブラシのように付いている荒い毛が生えていて、荒い毛の根元から付け根の周りの体も赤い(胴体の後4分の3位)。背中には縦に太くて赤い線が一本通っている。一見したところ赤黒い毛虫と言う印象を受ける。

飼う鉢には5cmほど土を入れ、雨よけと逃亡防止のために、上を半透明のビニールシートで覆い木陰に置いた。餌は庭の実生スミレを根こそぎにして与えた。幼虫の脱皮や蛹の止まり木にと枯れ枝を突き立てたところ、よく使ってくれたようだ。幼虫は見つけたときの体長15mmのものが、蛹までに1ヶ月ほどかかり、枝に尻を引っ付けてぶら下がり、丸1日で蛹になった。蛹の色は褐色から黒褐色まで個体差少しあるが、背側には金色の光点が10個(頭から胸辺りに2列5段の突起部)付いているのは同じだ。

棒切れに付着した蛹を屋内に取り込み観察したが、ほぼ2週間(±1日位)で4匹が順次(4月29日~)羽化した。残念ながら、羽化の瞬間には立ち会えなかったが、羽化直後には出合った。蛹から抜け出て1時間ほどで翅を伸ばし、余分な体液(薄いピンク)を放出、30分くらい経つと近くを飛び回りながら、更に余分な体液(ほぼ透明)を放出して、身軽になって飛んで行くようだ。雌雄とも前翅の下側で普段は後翅と重なって見えない部分がピンクであることが、羽化直後の拳動中に見られた。成虫は全て外へ放してやった。

4匹飼ったうちメスは1匹だけでオスが3匹だったので、自然界では元気な強いオスだけが良い子孫を残せる厳しい世界かと思っただが、後でもう一度飼育した4匹はメスが3匹にオスが1匹で、8匹だけのデータであるが雌雄の数は差が無いようである。庭に飛んでくる蝶は産卵目的のせいか、メスの方が圧倒的に多い。

5月中旬以降、庭で産卵する蝶を何回となく見ているが、直接スミレやパンジーに産卵する事は少なく、花壇の縁のジャノヒゲやヘビイチゴなどの小さな草への産卵が多いようだ。アゲハ(ミカン科)やモンシロチョウ(アブラナ科)などの食草に産み付けるのとは違うようだ。今年の5月に最初の産卵を目撃してから2~3週間すると、パンジーの葉や花に食害が目立ち、探してみると見覚えのある幼虫がぞろぞろ出てきた。もう一度4匹捕まえて先に使った鉢で飼育したところ、6月の下旬から7月にかけて蛹となり羽化した。春先より1~2日成長が速いようだった。

6月2日の日経新聞(夕刊)に、ツマグロヒョウモンについての記事があった。近年園芸熱が盛んでパ

ンジー類が秋から冬を通して売られ、公園や家庭の花壇などに植えられるので、幼虫で冬を越す(初めて知った)ツマグロヒョウモンには、この上ない餌場になってしまい、地球温暖化と相まって、この蝶の北上や繁殖を大いに助けていると報じていた。

また、6月26日のNHKテレビ(クローズアップ現代)でクマゼミの箱根越えには、街の緑化が原因の一つになっていると報じていた。すなわち、都内のある公園に大きなクスノキを植えたが、後からクマゼミの抜け殻が沢山ついていたので、木の出荷地を調べると九州だったそうで、根巻きした土の中にクマゼミの幼虫がいたらしいのだ。この年から周りでクマゼミの声が一度に増えたと紹介していた。

同テレビ番組で近年アキアカネが激減しているが、稲作で根の発育を促す目的で一時田を干す(中干しと言う)が、ちょうどアキアカネの羽化前のため、ヤゴがみんな死んでしまうのが原因だと話していた。

当会では美術館前の自然池の一部を埋めて水際状態を作った時、土は近くの荒川の河川敷から採ってきて、自然の植生を乱さぬよう配慮したが、動植物の生態を乱さないためには、動植物を移動しないことは勿論、卵や種が付いている土や枯れ草などの移動にも、細心の注意が必要なことを痛感した。

私も一時スミレに興味を持ちいろいろな種類を育てたが、花後の結実が良いうえに、夏の間じゅう次々と閉鎖花(花が咲かずに種が出る)を造り・種を弾き飛ばし・よく生えるので、庭中がスミレの実だらけになってしまっているが、これがツマグロヒョウモンを呼ぶ結果になり、彼らの繁殖に手を貸してしまったようだ。もう少し庭の下草採りに精を出さなければと反省もしている(猪鼻 昭二)。

「街路樹の樹形の大切さ」に思う

先日、「みずみどり第60号」が届けられ、読ませていただきました。そのトップ記事に、“「板橋区の木ケヤキ」の気になること”という文が坂本郁子さんから寄せられていました。

私の実家は、北区の滝野川ですが小学校低学年のときに両親の意向で成増駅の近くの高台にあった高木家に縁故疎開で身を寄せ、後に現在の赤塚第2中学校の前の父が譲り受けた土地に家族と共に移り住むようになりました。板橋区の木は「ケヤキ」とのことですが、家が農家という小学校の友達は何人かいたので良く遊びに行っていました。ほとんどの家がそうでしたが、かやぶきの家の後ろには常緑樹の高木が植えられ、また大きなケヤキの木がその周辺、また広い庭を取り囲むように生い茂っていたのを覚えています。いずれも冬の北風や夏の日照りを防ぐ絶好の遮蔽林になっていたのでしょう。当時の成増駅周辺には、現在のようなビル群はなく、広い畑をはさんで軒々と農家の家々が同列でしたが、家が見えるというよりもそれらの家の周辺を取り囲んでいるケヤキの高い伸びのびとした樹形によって、成増の駅からも農家の家の存在を知ることが出来るのでした。これは、今でも思い出す成増や赤塚の一つの「原風景」であったと思います。恐らくこのようなシンプルな「原風景」が成増から赤塚、徳丸、西台、中台、そして志村の高台へと続いてきたからこそ、ケヤキが板橋区の樹木となったのではないかと考えています。樹木の名前を

その木を見てすぐに言うのはなかなか難しいものがありますが、十分に生長したケヤキの木は誰にでもすぐにケヤキと分かるのです。そのケヤキの樹形の美しさは、まさに扇(おうぎ)状に天空に伸びやかに伸びる枝々の形の美しさにあります。

冒頭の坂本郁子さんの記事は、その特徴のある美しく伸びのびとした樹形が無残にも、大胆というか、ただ大枝を切り降ろせば良しとするという行政的政策からか、「公有地の木は、ケヤキに限らずひどく切り詰められている。...ケヤキがほとんど電信柱のようにぱっさり枝切りされたときはショックだったが、近頃はどこでもこんな切り方をしているようだ。」という文となった訴えだと思うのです。

私も、成増から高島平方面に緑を求めて出掛けることしばしばですが、このような情景が嫌でも目に付くのが板橋西郵便局から徳丸八丁目に向かう両側の街路樹です。春先は新芽も出ず、5月になるといみじくも坂本さんが言われているように「新しい葉がとろろ昆布が枝にひっかかったようについて痛ましい」状況となりました。太い幹から出ている中程度の枝が途中からすぱっと切り落とされた木々が、葉が出て、枝が伸びた昨今の様はあたかもヤナギの木ようです。

この枝降ろしの間違いは、たとえその枝を真ん中から切り落としたとしても、その先に上に向かう細い枝を残していないことです。そうしておけば枝降ろしの一つの目的も果たせるし樹形の醜さも救えたと思います。樹形の大切さ、その美しさを何とか少しでも残そうとの考えがあれば、その間違いは防げるのです。今年の枝降ろしの害は目に余るばかりで、今後何年経ったらケヤキ本来の樹形に戻るのか見当がつかません。それが板橋区に広く行われているのですから、板橋区の景観の大きな損害であると思います。ただ、私の見る限りでは練馬区にも及んでいて、今までに知見していなかった今年はじめてみるケヤキの枝降ろしの現状です。

こうした街路樹の剪定・枝降ろしの惨状は、成増駅の北口に配置されたカツラの木についてもいえます。過去2回、このカツラの剪定については区長を通して、あまりにもひどいそのやり方について訴えてきました。もうあまり枝は落とさないという方向でやって貰うということになりましたが、過去に木の頂点を伐られ、やっと伸びたカツラ独特の優雅な枝も落とされてしまった樹形は、一向に修復出来ず今年も弱々しい樹形をさらしています。カツラ本来の樹形は、東北の山間に見られるような亭々たる豊かな大樹なのですが、成増北口の駅前のカツラはまったくその樹形を止めてはいません。この木は、本来剪定をしなくてはならないこのような所に、植えられるべき樹種ではなかったのです。

驚いたことに、この文を書き進めている時に、「みずみどり第57号」に偶然接することができました。「街路樹について」というこの文は猪鼻昭二さんの書かれたものでしたが、板橋区内の街路樹について大変丁寧な観察をさせていて、低木の街路樹にまで話が及んでいて大変参考になりました。多くの方が、区内の街路樹に心を向けていることが分かりました。

さて、ヨーロッパの3大街路樹は、菩提樹、プラタナス、マロニエと言われているようですが、かつて、ドイツに赴いた折、パッサオというドナウ川のほとりにある町で見た街路樹マロニエの美しさは今も私の頭に焼き付いています。マロニエは日本でいえば、トチノキに近い樹木ですが見事な樹形を誇り、その枝々

の頂点には大きなローソクを取り付けたような素晴らしい淡いピンク色の大きな花が咲いていました。町の道沿いに植えられたそれらの街路樹は、こんもりとした深い緑蔭を作っていました。また、バスの移動日にカイザースラウルテンからニュンベルクを経て、先ほどのパッサオの街に至った時も、周辺の自然林の緑と共に、街路に立ち並ぶ木々の樹形の美しさに心を和ませ、その魅力に惹かれました。きっとその国の人々は長い歴史の中で、そのような町の景観を愛してきたのだと思います。

振り返って、日本の街路樹の樹種の選択やその後の街路樹に対する配慮は一体どのようになっているのでしょうか？ 板橋区予算の関係だけで、ただぼっさり切ってしまう今のやり方から、町の人たちが心癒され、その樹木蜘蛛の樹形や緑蔭を楽しめる街路樹行政を、私は今後も区に望んでいきたいと思っています。(2007.6.20 岩田 浩司)

足立区のビオトープ公園と都市農業公園

「いかにして自然を取り戻すか」は自治体の大きなテーマのひとつでしょう。自然を取り戻すとは、今ある自然(民間の雑木林等)を保全する(買収する) 自然でないところを自然にする(自然の創出) それを維持していくこと、それには経費もかかります。

財政難で板橋区のみどりの基金が廃止され、民有地の雑木林などを買い取る予算がない状態でした。が2006年に民間樹林地を保全する方針が示され、樹林地を買収する裏付けができ、昨年成増4丁目樹林地の開発には、森の一部を区が買収し、全部ではありませんが森は保全されました。これは大きな前進です。、 については板橋区ではまだこれからの課題です。

私たちは、新たな自然の創出と 自然の維持と活用を勉強するために、足立区にある桑袋ビオトープ公園と都市農業公園を見学しました。

廃校になった小学校跡地にできた足立区立桑袋ビオトープ公園

場所は埼玉県に近い、日本で有数の汚濁河川である綾瀬川と綾瀬川より汚かった支流の伝右川の合流地点にある。少子化による学校の統廃合で使われなくなった小学校を壊して大きなビオトープがつくられました。ビオトープ公園 - 環境を整えることで、生き物たちが自然と集まり暮らすことを目指していく公園です。ここには伝右川の水を浄化して綾瀬川に放流する国交省の大規模な浄化施設があり、浄化された水の一部がビオトープの水源になっています。浄化施設の上は草原ビオトープになっています。まだ2年しか経っていないこと、付近に雑木林も畑もない場所での自然復元なので、水辺に来るのはもっぱらトンボ、招かざる客のザリガニ、ミシシッピーアカミミガメ、ウシガエルは放流された可能性もあるし、川の水と一緒にやってきた可能性もあるとか。小さな流れがあり傍らにイトトンボが止まっていた。その流れでザリガニを捕まえて遊ぶ子供達、見ているだけでほっとする光景でした。

今の綾瀬川も伝右川も、下水道の整備や汚濁負荷量の高い工場の移転等により水質は非常に改善されてい

ることも付け加えておきます。



写真左：大賀蓮だけを植えた浅い方の池。深さ約10cm

写真右：伝右川浄化施設の上の草原ビオトープ。2年目。周囲は草刈り2回/年、左半分(写真)は草刈り3回/年、右側の見えない部分が草刈り5回/年。3回のところは5回のところと比べてイネ科が増えている。2回のところはハギとヨモギで1m程の高さになっている。赤塚城址バツタ広場の2年目に似ているが、草原の周囲環境が違うため、ここはやや単調。

感心したこと、うらやましかったことがありました。

- (1) 国(国交省)と足立区の合作であること。つまり行政が協働でつくったこと(これはすごい)
- (2) ビオトープが広いこと。集会所が一つと、国交省がつくった教育施設(清流館)があるだけで、あとは元学校の敷地が全部ビオトープ(ビオトープだけにこれだけの空間があるのがすごい)
- (3) 整備したあとの維持経費が計上されている。ビオトープの維持管理とビオトープをフィールドとした自然教育(イベント等)があり、私たちが見学した日はボランティアが増えすぎた水草刈の作業中でした。そのボランティア対象に毎月一回学習会もあります。いずれも常駐のインタープリター(日本語に訳すと通訳者、自然界を通訳 解説する人)という専門のスタッフが委託されています(つまり、足立区は維持と自然教育にしっかり予算をつけている。これもすごい)

今回見学したのは、桑袋ビオトープ公園、生物園、都市農業公園の3カ所ですが、いずれも公園行政として、公園の自然化と自然教育に取り組んでいます。

荒川に面した広大な都市農業公園

広々とした敷地にジャガイモ畑や麦畑、田んぼがあり、堆肥が積んであり、移築した農家(厩があったが火事で焼失)が昔の風景を再現しています。

ここでは日本有機農業研究会が無農薬有機栽培のお手本を示し、農業体験教室などの指導をしています。水を張った田んぼに子ども達の騒ぐ声が聞こえ、見ると



ビオトープ公園の堆肥置き場の「のぞき穴」：看板には「土づくり工場見学」「…従業員の働く姿をお見せしましょう。とはいっても、ただ食べてフンをするのをくりかえすだけです。工場長オカダンゴムシ」と愉快な説明がある。

一人の子供がドボンと落ちて泥だらけになっていました。今時貴重などろんこ体験です。農業体験教室のメニューには、米作り(荒起こしから精米まで)やサツマイモ、里芋作りがありました。04年発行の「足立区都市農業公園だより1」には夏の田の草取りで、子どもたちはカエルや足の出かかったオタマジャクシ、ヤゴ、トンボ、アメンボウなどを捕まえ、草取りが終わると、自然環境館の人が田んぼにいる生き物の話をしてくれました、とあります。この自然環境館が都市農業公園の自然教育部門で、自然を紹介する専門のスタッフが常駐しています。

農業公園のよいところは、人が入れないサクチュアリではなく、区民が無農薬農業という半自然に触れることができること、生き物が住めること(無農薬は生き物と人が共存していること)、その畑や田んぼという半自然を気づかせる専門家が常駐し、このフィールドを使って足立区の区民や子供達、学校教育向けに自然教育のプログラムができています。つまり農業の専門家と自然教育の専門家がいることになります。

足立区における自然(半自然)の残し方や環境教育の仕組みに感心して踏踏につきました。板橋区は赤塚公園など豊かな自然に恵まれています。しかし私たちが関わっている赤塚城址址域も東京都と板橋区に管理が分割され、行政側には自然を保全していく長期計画や管理方針はなく、保全活動は市民団体の自発性に委ねられています。足立区と比べて、これでよいのだろうかと思いついてしまいます(坂本 郁子)。

観察・活動記録(2007年5月-6月)

5月19日(土) 10:00~12:00 城址観察会「生き物の調査」

気温高く、快晴。それほど広くないバツタ広場は生き物で賑わっていた。都会の中でこんなに多くの生き物を育む赤塚城址の草原ビオトープはやっぱりすごい。以下はほとんどがバツタ広場(一部が隣の樹林)での記録。ハネナシコロギス、コイチャコガネ、カスミカメムシ、ギンツバメガ、キクスイカミキリ、アワフキ、キイロテントウ、コメツキムシ、ナナフシモドキ(幼)、ナナホシテントウ、テントウムシ(幼)、オオミノガ?、ヒシモンナガタママシ、キバラモクメキリガ(幼)、マイマイガ(幼)、ヨコバイ、リング、メイガ、ヤノナミガタチビタママシ、ハモグリバエ幼虫(絵かき虫)、ハナバチ、カイガラムシ、シロスジツトガ、コヤガ、コナガ、ハマキガ、キイロテントウ、ムシヒキアブ、ハエ類、クモ類。

5月26日(土) 10:00~12:00 ミニトンボ池のザリガニ捕獲、バツタ広場のササ、クズ切り。
ヒメウラナミジャノメを見た。

6月9日(土) 足立区桑袋ビオトープ公園、生物園、都市農業公園見学

6月10日(日) 10:00~12:00 バツタ広場の植生調査。 今年はブタクサが増えた。ヒオドシチョウ(羽化したばかり)を見た。

6月16日(土) 10:00~12:00 「城址観察会」

トンボ池にはシオカラトンボ、コシアキトンボ、バツタ広場の空にも数多くのコシアキトンボが飛んでいた。城址の広場は2度目の草刈り後でさっぱり。草が茂ったバツタ広場では、虫の活動が賑やかで、カメムシ、ヤマトシジミが交尾、ヤドリバチが朽ち木に産卵。ヤドリバチはカミキリムシの幼虫に寄生するそう。ヤドリバチはこの朽ち木にはカミキリムシの幼虫がいることを知っているのだろうか。シオヤアブが甲虫を捕まえて食べていた。サトキマダラヒカゲ、ムラサキシジミ、ルリシジミ、キマダラセセリ、トゲヘリカメムシ、ウズラカメムシ(幼)、アカイロテントウ、クモいろいろ。

活動のお知らせ

運営委員会は毎月第1金曜日です。どなたでも参加できます。

8月運営委員会：8月3日(金) 18:30～20:30

9月運営委員会：9月7日(金) 18:30～20:30

場所：エコポリスセンター環境学習室

会報の印刷・発送は奇数月。お手伝いできる方はよろしく

日時：9月14日(金) 18:00～ 場所：エコポリスセンター

変更する場合もあるので、事務局にお問い合わせ下さい。

活動の問い合わせは瀬田まで(3969-7124)

会では赤塚城址周辺で、私たちが作ったビオトープを中心に自然の変化を観察したり、ゴミ拾いや、ビオトープの改善作業等を行っています。観察会は原則として雨天も実施します。

8月の活動 赤塚城址周辺観察会

日時：8月18日(土) 10:00～12:00

テーマ：トラップにはどんな虫が集まっているのかな

落とし穴や、餌の入ったかごに入った昆虫を観察、トラップの作り方、しかけ方もお教えます。クワガタ、カブトムシ、オサムシ、シテムシなどの甲虫類のほか、チョウやキリギリスの仲間も来ます。

集合場所：赤塚トンボ池前(板橋美術館そば)

持ってくるもの：あれば双眼鏡、虫眼鏡、図鑑、ヤブ蚊対策もお忘れなく

9月の活動 赤塚城址周辺観察会

日時：9月15日(土) 10:00～12:00

集合場所：赤塚トンボ池前(板橋美術館そば)

持ってくるもの：あれば双眼鏡、虫眼鏡、図鑑

生き物のすめる環境整備

7、8月は休みます。

あなたも会員になってください(年会費2000円：振込先は表紙に記載)

いたばし水と緑の会の活動はすべて会員の会費によってまかなわれています。主な用途は、会報郵送料、印刷費、ビオトープ池維持管理のための資材費、コピー代などです。